美術の館
兵庫県立美術館
HYOGO PREFECTURAL MUSEUM OF ART
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1
Phone:078-262-0901
http://www.artm.pref.hyogo.jp

QUARTERLY REPORT
アートランブル
VOL. 21
2008年12月20日発行

ARTRAMBLE

学芸員の視点 ―― ❷❸
ブラジル交流展がもたらすもの ―― 河崎晃一
特別寄稿 ―― ❹❺
シャガールが「色彩の詩人」を超えるとき ―― 樋上千寿
ショート・エッセイ ―― ❻
作品の過ごす時間 ―― 江上ゆか
トピックス ―― ❼
シャガール展関連事業
文化の日イベント
1000人のおやこ絵画大会
美術館の周縁 ―― ❽
「障害者アート」公募展の意義 ―― 服部　正

コレクションから

写真を見て、なにか座るための物体をイメージしてしまった人がいるのでは。床から浮き上がった、座面のような部分や、背もたれに似た形もあるので、ベンチに見えなくもないです。作者がそのようなイメージを意識していたかどうかわかりませんが、ベンチに似た形にも彫刻的可能性があるのでしょう。

作品は、板及び立方体、扇面体のユニットで構成されています。材質はアルミです。左右に垂直に伸びる立方体の集合は、床に接するところで扇面体になって内側に入り、次の扇面体は角度を変えて奥に後退し、今度は立方体が横に広がります。その上に天板が置かれています。手前の方は下に支えがなく、突き出ているので、不安定さがありますが、さほど感じさせないのは、後ろにベンチの背もたれのような、斜めに置かれた立方体があるからでしょう。板とブロックの対比、あるいは、垂直性と水平性（床からの自立と床との繋がりといいかえることもできます）の対比、そして、調停役としての斜めの立方体の存在。このように、この作品は形態や構造、力関係など、彫刻の本質的なテーマを扱っているのです。

清水（きよみず）九兵衛は七代目清水六兵衛を襲名する陶芸家でもありました。彫刻においては、アルミを素材に使った抽象彫刻の第一人者でした。

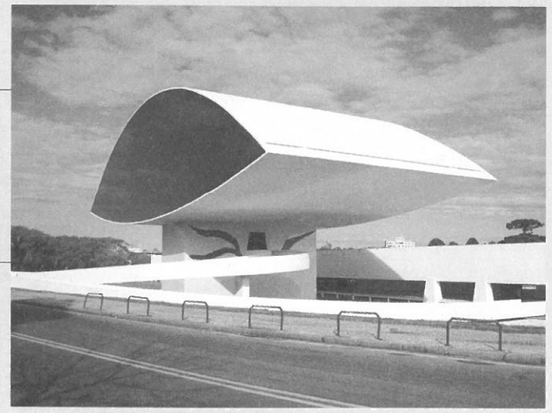
（出原　均／当館学芸員）

清水九兵衛（1922～2006）
《FIGURE 11》
1985年
アルミニウム
79×212×167cm
平成19年度清水久仁子氏寄贈

QUARTERLY REPORT
ART RAMBLE
VOL.21
2008年12月20日号

ブラジル交流展がもたらすもの

河﨑　晃一



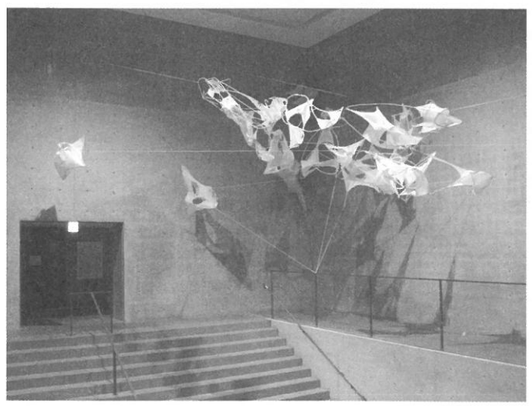
オスカー・ニーマイヤー美術館

今年は、日本人のブラジル移民が始まってから100周年にあたり、日本ブラジル交流年として国レベルでの交流が4月末から6月末を中心に両国で行われた。特に神戸は、ブラジルへ移民した人々にとっては、日本最後の地であり、ことのほか思い入れの深い街である。JR元町駅の北、鯉川筋を上り詰めたところにある旧神戸移住センター（昭和3年竣工）は、今もその面影をとどめ、里帰りした日系人たちが訪れる場所だ。今年一年間は改装工事中であるが、来年4月からは新たにブラジル移民資料館や日系人の教育施設として再出発することになっている。

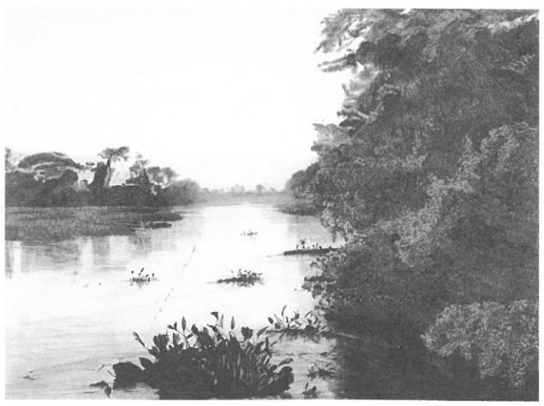
兵庫県がブラジルのパラナ州と昭和45（1970）年から友好関係にあることはご存知だろうか。また州県レベル提携に加え、クリチバ市と姫路市、ロンドリーナ市と西宮市、マリンガ市と加古川市、パラナグア市と淡路市もそれぞれパラナ州の各都市と姉妹友好都市を結んでいる。平成17（2005）年には、姉妹提携35周年記念行事が開催され、そのときパラナ州の州都クリチバにあるオスカー・ニーマイヤー美術館（以下MON＝Museu Oscar Niemeyerと表記）と兵庫県立美術館の交流展開催の計画が提案された。そして今年、移民100年を記念して、6月23日から10月5日までMONで「日本の美術　近代から現代へ－兵庫のコレクション」と題した展覧会が開催された。また、11月1日から12月7日までは、兵庫県立美術館において「ブラジル×日本　旅が結ぶアート」が両館の交流展として開催されパラナ州出身作家3人が紹介された。

平成18（2006）年春に来日されたMON館長より「兵庫県立美術館のコレクションから近代、現代の日本の美術をブラジルで紹介してほしい」との要請を受け、兵庫のコレクション展開催に向けての本格的な準備に入った。担当となった私が、まず直面したのは兵庫県立美術館の収蔵作品が、当初から日本の近代美術史を網羅する目的で形成されていないことであった。しかし一方で美術史上重要な本多錦吉郎の《羽衣天女》をはじめ小磯良平、金山平三、吉原治良と具体など日本美術の主軸を多く収蔵していることも注目に値することがわかった。そこで内容をよりローカルなものとして「兵庫のコレクション」をキーワードに個性的な作品を選ぶこととした。その結果、作家の名前で選んだ日本の近代美術史ではなく、「兵庫」を前面に出す内容の展示となった。また展示期間の限定などを考慮し、日本画は避け油彩作品から代表的な作品を選んだ。そして県下の公立美術館の所蔵品を加えることで、オール兵庫の発信とすることに重きを置いた。姫路市立美術館、神戸市立小磯記念美術館、芦屋市立美術博物館、西宮市大谷記念美術館の協力を得て合計70点の油彩画と木版画がブラジルへ旅することになった。美術館の国際交流事業として多くのコレクションが海外に行くことは、平成11（1999）年にパリで開催された「具体回顧展」以来のことである。今回は出品作品の選考から輸送、MONでの展示、撤去まですべてを日本側に一任されたかたちで準備が進められた。ただ、開催経費に関しては、お互いの館の展示は自らが負担することが決められた。

昨年7月、事前打合せのため初めてクリチバを訪れて、まずオスカー・ニーマイヤー設計の建物のスケールに驚かされた。われわれの常識では考えられないようなかたちで建つ展示室は、ただただ呆然と見上げるだけであったことを記憶している。展示は、展示空間から考えて、その建物ではなく他の展示室で行うことと決めた。その後、展示作品の選考、展示スペースについての意見交換は、お互いの思いもあり、時として行き違いがあったが、連絡手段が電子メールへと発展した現代においても、やはり最終的な話し合い、決断は、顔をつき合わせ相手のニュアンスを伺いながら、また実際の場所を目の前にして交渉を進めなければ納得がいく答えがでないことを実感した。MONでの展示の準備は、4月に入って最終的な出品作品が決まった後、当館の修復担当者による一点一点のコンディションチェックがなされ、6月初旬修復担当の田中学芸員と私がクーリエとして作品とともに空路クリチバに向かった。MONでの準備期間に余裕を見ていたもののサンパウロ到着後、通関手続きに日数がかかり、予定より数日遅れた作業開始となった。日本から輸送業者2名の同行を頼んでいたため、その後の作業は順調に進んだが、すべての作業が終わり、会場が完成したのは、オープニングパーティーの20分前だった。



ジョゼ・アントニオ展示風景（兵庫県立美術館）



フランシスコ・ファリア《シェライエス（かすかに消された）》2006年

オスカー・ニーマイヤー美術館展覧会入口

マゼ・メンデスアトリエ

クリチバでの交流年の記念式典には、井戸兵庫県知事をはじめ兵庫県関係者が多数訪れ、賑わいを見せ、各地で行われた歓迎事業の合間を縫ってのオープニングパーティーは午後6時30分からの開催であった。レキヨウ・パラナ州知事、井戸兵庫県知事そしてマリステラ館長（レキヨウ州知事夫人）による開会の儀式（ブラジルでは、テープカットではなく、結ばれている紅白のリボンと緑と黄色のリボンをほどいていくセレモニーだった）をスタートに300人近い人が来館、初めて接する日本の近現代美術に深い興味を示した。特に、川西英の木版画、中西勝、鴨居玲そして具体作品の力強い表現が関心を呼んだ。最終的には50,000人ほどの入場者があったと聞くが、その多くが学生であると思われる。MONは学校との連携による教育普及に力を入れ、州がバスを仕立てた移動を提供し、毎日多いときには300人以上の学校生徒が美術館を訪れるという。そして、教員との間に鑑賞教育のシステムも作られている。オープニング当日の夜にも多くの高校生が訪れて静かに鑑賞していたことには驚かされた。そのほか美術館運営、収支、仕事の役割分担など日本とは大きく異なり、戸惑うことも多かった。

兵庫県立美術館でのブラジル展は、まずパラナ州出身、在住の作家をMONの所蔵する作品から選ぶことから始まった。1回目のMON訪問で作品を選び、2回目には作家のアトリエを訪問し出品の依頼を行った。輸送や招待などさまざまな条件が伴う交渉であったが、日系人の通訳が入っていただけたお陰で交渉もスムースに運び、作家とのコミュニケーションも取れて安心して仕事を進めることができた。その後、展覧会のタイトルを「日本ブラジル交流年　ブラジル×日本　旅が結ぶアート　兵庫県立美術館十オスカー・ニーマイヤー美術館交流展」と名づけ「旅」することをテーマに広報へとつなげた。出品することとなった3人は、もちろん日本では初めての紹介である。いずれも50歳代のベテランであり、いわゆるグローバル志向の現代美術ではない。展示された作品をじっくりと見ると、ブラジルの社会的背景やルーツ、歴史、地域性などをテーマとしている作家たちであることが伝わってくる。周到な準備をしていたにも関わらず、作品の到着予定が直前まで決まらず、綱渡りであったが、無事11月1日にレキヨウ・パラナ州知事夫妻をはじめ多くのブラジルからの賓客を迎えオープンすることができた。

赤川コレクション展示風景（左は、マナブ・マベの作品）

今回の展覧会では、美術館交流とは別個にブラジル日系人画家たちの作品を展示している。これは、サンパウロ在住の美術品コレクター、リカルド・タケシ・赤川氏から氏所有の日系ブラジル人画家の作品約60点の寄贈申出があり、その一部を寄贈手続きに先立って公開したものである。赤川氏は日系二世で、昨年旧神戸移住センターを訪れた際、そこが自身の父や祖父母が旅立ち前に寄宿し夢を膨らませた場所であること、更に昨年は次男の日本への留学で神戸に対する一層の親近感を持つに至ったことに由来している。これらの作品は、日本人のブラジル移民100周年記念への寄与とさらなる日伯交流を祈念し、今後調査と手続きを経て当館に寄贈されることとなる。

さて、今回の「ブラジル×日本　旅が結ぶアート」は、来館者にどんな印象を与えているのだろうか。なじみのないブラジル美術は、他館で開催されているブラジル現代美術展に比べ地味な印象を受ける。しかし、3人の作品からは、それぞれの伝統的なブラジルへの思いが感じられた。また、「美術館でブラジル！」を目指して数多く開催されたイベントは、参加者も多く中身の濃い内容であった。特に、アーティストトーク、サッカーとアートでは、ブラジル人の生の言葉からブラジル人気質を知ることができ、展覧会を通じて異国をいつもと違った角度から知ることができたように思う。日本人から見るとラテン系と呼ぶ人たちは、陽気でアバウトな性格だけではなく、人を思う気持ちが強いことなど、一概に評価しては見えてこないことが多い。美術作品を通じて、今一度ゆっくりとブラジルに思いを馳せてみることにしたい。

（かわさき・こういち／当館学芸員）

QUARTERLY REPORT
ART RAMBLE
VOL.21
2008年12月20日号

シャガールが「色彩の詩人」を超えるとき

樋上　千寿

《文学》《演劇》《舞踏》《音楽》と《婚礼の宴》展示風景

《ユダヤ劇場への誘い》（右）と《舞台上の愛》展示風景

特別寄稿

毎年、数多く企画される「シャガール展」のなかにあって、先般の「シャガール展：色彩の詩人」は、初期作品から晩年期の作品までを網羅した充実の内容で来館者を満足させた企画展だっただろう。普段は美術館でもお目に掛かることのできない個人蔵の作品が多かったのも幸運であった。さらに、近年開催される多くの「シャガール展」でも展示される版画作品でも、作家自身による彩色入りの『ラ・フォンテーヌの寓話』を陳列するなど、見応えのある美味しい内容であった。そして本展の「目玉」は言うまでもなく《ユダヤ劇場壁画》（以下、《劇場壁画》）連作7点だっただろう。

《劇場壁画》はスターリンの粛清の標的になることを恐れた関係者により、長らく旧ソ連内で秘蔵されていたが、冷戦終結後50年の眠りから醒めて、1991年から世界各地で「お披露目展覧会」が開かれた。我が国でも、1995〜96年にかけて初公開され、その後2002年にも再来日が実現、そして今回が3度目の来日となる。その間、ズィヴァ・アミシャイ=マイゼルズやスーザン・コンプトンら、第一線の美術史家によって研究成果が蓄積されてきた。それらを踏まえるならば、《劇場壁画》は、イディッシュ演劇の過去、現在そして未来の姿を表す絵画によるマニフェストであり、シャガールがイディッシュ演劇の来し方、行く末をどのように考えていたのかを表す巨大メッセージ・ボードであったと言える。この壁画を展覧することは、東欧ユダヤ文化=イディッシュ文化を紹介するのとほぼ同義であるとさえ言える。そして、そのことはこれらの作品を享受する事以上に意義のあることでもある。

イディッシュ文化とは、十字軍の東征に追われるようにしてポーランドを中心とする東欧諸国へ離散したドイツ系ユダヤ人たちが育んだ固有の文化である。彼らの言語イディッシュ語はドイツ語をベースとしながらも聖なる言語としてのヘブライ語や離散地のスラブ系言語を多く取り込んで独自の発達をした。彼らはキリスト教文化を奉ずる諸国の中にあって、シュテートルと呼ばれるユダヤ人町に居住し、ユダヤ教の習慣に基づく日常生活を送った。不況の腹いせにたびたび起こされたユダヤ人襲撃「ポグロム」の恐怖に悩まされつつも、集団としての生は継承された。そのシュテートルの文化に変化が起きるのは19世紀中頃からである。それに先立つ18世紀中葉には、ドイツで「脱イディッシュ=脱被差別」と「西欧化」を掲げるハスカラ運動が興る。比較的閉鎖的な東欧のシュテートルのユダヤ教「ハシディズム」も、シャガールの時代にはこのハスカラの影響を受け始めている。その顕著な証として、ユダヤ人シャガールが、ユダヤ人の絵画教師につくことを望み、絵を描くことを不自然に思っていなかったことが挙げられる。周知のようにユダヤ教の十戒にある偶像崇拝禁止の掟により、ユダヤ人は装飾的な工芸美術は手掛けたものの、「絵画を描く」ことは永らく進んでしなかったのだ。特に、人物像の描写は避けられ、人物の姿が必要な場合は顔の部分を動物にすげ替えた表現が用いられた。シャガールの《劇場壁画》に、果たしてその慎重さが感じ取れるであろうか。ユダヤ人が絵を描く時代になったということは実は大変注目すべきことなのである。

確かに、ユダヤ文化についての理解が希薄な我が国でイディッシュ文化を紹介することは欧米諸国で同様の展覧をする場合とはまったく事情が異なり、まずイディッシュ文化についての基本的な共通理解を形成する必要がある。それには、ユダヤの歴史・文化理解に基づく的確な解説を作品に付すことはもちろん、パンフレット類の充実や、講演、ユダヤ音楽の演奏会などとの組み合わせが有効だろう。本展でも講演やDVD上映により、ある程度理解が進んだものと思う。しかし、1991年以来、すでに研究者の間ではシェアされている壁画についての解釈の成果が十分に生かされたのか疑問に感じた。専門用語の誤記や、ヘブライ文字の知識が十分でないことによる不正確で主観的な解説がなされていたことはこの疑念を増幅させる。言うまでもないが、誤解は偏見を生む。

そして、巨大メッセージ・ボードとしての壁画作品のテーマ性を、先行研究に基づいて紹介する作業はどうやら十分ではなかったようだ。その一端は、前述の解説のほか、その展示順序にも看て取れる。私は展示ルートに従って作品を観た後、逆順で観直すという習性があり、今回も一通りの展示を観たあと、再び壁画展示のブースに戻って行ったのだが、そのとき、シャガールが当時の劇場プランに沿って考え出した観覧順序にぴったりはまった見方をしていることに偶然気付いた。すなわち、本展の展示ルートのように、舞台上手側から入場するのではなく、《舞台上の愛》の左側（実際の劇場の出入口はこの一箇所である）から入場し、まず目に飛び込んでくる《ユダヤ劇場への誘い》（以下《誘い》）の画面左下から右上へと視線を動かすことになったのである。すなわち、《誘い》では、左側にイディッシュ演劇の過去が描かれ、エフロスに抱かれたシャガールと、その先を踊りながら右へと移動する劇場監督のグラノフスキーら3人は、3つのスポットライトの内最初のスポットを浴びつつ、現代のイディッシュ演劇の担い手として画面中央へと入場する。中央のスポットでは、ユダヤ音楽クレズマーを演奏する楽帥たちが、当劇場主演俳優のミホエルスを迎え入れる。そして、イディッシュ演劇の未来を照らし出す3つ目のスポットにはとんぼ返りを打っている3人の道化師がいる。実際の入口から劇場へと入場すれば、おそらく大方の来場者はこのような手順で《誘い》を観て行くことになる、とシャガールは想定していた。同様に、4つの芸術ジャンルを表すパネルは、その上方に掲げられた横長のフリーズ《婚礼の宴》と有機的なつながりを持って、《文学》から順に左方向へと視線を移していくように想定されていた。

これらのパネルとフリーズを統合するテーマは、シャガールと同世代で同郷の劇作家でイディッシュ文化の保存にも尽力したS.アンスキーによるイディッシュ語の新作戯曲『ディブック（悪霊）：二つの世界の間』の筋書きである。シナゴーグ（ユダヤ教会）でカバラ（ユダヤ神秘主義の教義）の研究に没入するあまり命を落とした青年が、恋仲だった女性の結婚式の夜、ディブックとなって花嫁の身体に憑依する。花嫁と一体化したディブックをラビ（ユダヤ教の指導者）たちが悪霊払いの術を用いて引き離すが、今度は女性の魂が青年の魂に呼び寄せられ昇天する、という結末である。パネルが《文学》から始まり、またトーラー（聖書）のような巻物の上にイディッシュ語の文言「あるとき…」と書かれていることや、《演劇》での婚礼の場面、《舞踏》に書き込まれたヘブライ文字の「花婿の声」「花嫁の声」という語句が、白地と黄地にそれぞれ置かれて、天と地の異なる二つの世界の「声」であることを表していること、《音楽》の上方で飛翔する人物像（花嫁の魂）が描かれていること等々は、この筋書きを暗喩するものである。そして、これらのパネルを視覚的にも繋ぐ《婚礼の宴》では、食卓が中央の斜線で仕切られ、地上からの視線と天上からの視線で同じ食卓が描かれる。これも『ディブック』の副題である「二つの世界の間」に沿うものである。食卓の食器の色彩が、各パネルの主要な色彩と呼応していることも見逃せない。さらには、4つのパネルは、向かい合う《誘い》とも響き合うように意図されている。《誘い》左端の緑色の牛と、《文学》の白い牛（この牛は、口から「シャガール」の名を発している）、《演劇》の主役「バドフン」の黒い服と、シュプレマティズムを暗喩する《誘い》の黒い帯の呼応、《舞踏》の踊り手と音楽家の姿は、向かい合う《誘い》の中央で演奏するクレズマーの楽師と響き合う。そして、《音楽》では、オレンジ色のバイオリンが、同じく《誘い》の右下で演奏する楽師のオレンジ色のバイオリンと呼応する。《舞台上の愛》は、本物の舞台と呼応するもうひとつの「舞台」である。そこでは、グラノフスキーらが目指した、イディッシュ演劇へのバレエの導入がほのめかされると同時に、やはりここでも『ディブック』で共に魂となった花嫁と青年の結び付きが暗喩されている。このように、《劇場壁画》は個々の作品として存在するのではなく、統一的なテーマをもって融合されているのである。

《劇場壁画》は、シャガール作品のなかでもとりわけモチーフがぎっしり詰め込まれた作例であり、これらを受け容れるためのある程度の「共通理解」がないと、一見すると意味不明の一大群像作品として観る者を惑わす。観衆の自らの感性で自由に解釈し、享受してもらうには限界があるだろう。

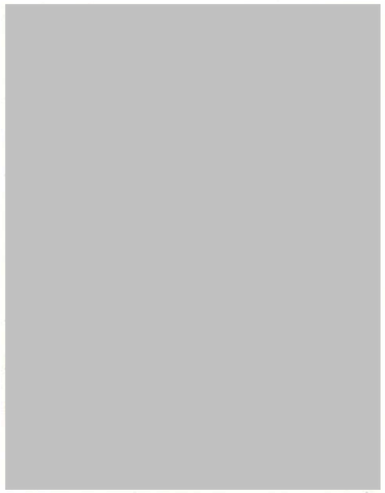
《劇場壁画》が重要なのは、旧いイディッシュ文化と、ハスカラ後の芸術思潮の双方を理解したシャガールだからこそ描き得た作品である、というだけでなく、その背景を知ることが、東欧ユダヤの歴史と文化、第二次世界大戦でのユダヤ文化の破壊とその後の復活、そしてユダヤ人芸術家が多く関わった20世紀美術の発展、というより大きな文化史を見直す好機になる、という点にもある。企画側には、その導き手としての役割が期待されていたはずである。

イディッシュ文化についての正確な理解を観衆と共有することができていれば、同じくイディッシュ文化がその背景となって描かれている版画シリーズ『わが人生』の理解も容易になったし、シャガールが「色彩の詩人」だけに終わらない巨匠であることを感じ取ることもできただろう。

もちろん、研究者側からの情報提供が十分でなかったことも、本展の「目玉」の本質を伝えきれなかった一因であると、反省している。企画側との情報交換をより綿密に行い、次回の来日時には、さらに手厚いもてなしで出迎えたいものである。

（ひのうえ・ちとし／美術史家、演奏家）

シャガール研究を進めるとともに、東欧ユダヤ音楽クレズマー楽団「オルケステル・ドレイデル」を主宰、美術館や大学でのレクチャー・コンサートを精力的に行っている。主要論文「シャガールの修復（ティクーン）」『民族藝術』第19号、民族藝術学会編、2003年など。



《祖父たち》（『わが人生』シリーズより）
1922年　エッチング・ドライポイント　個人蔵

QUARTERLY REPORT
ART RAMBLE
VOL.21
2008年12月20日号

作品の過ごす時間

江上　ゆか

「木版画と銅版画のつくり方」では、版木や摺り見本、ゲーム感覚で多色木版の原理を知るカードなども展示した。

ショート・エッセイ

今年度、当館ではコレクション展の方針を見直し、今までとは少し色合いの違った展開を試みている。従来はゆるやかなテーマを設けつつも名品を時系列に並べることが多かったのだが、本誌19号2頁でも紹介したとおり、3月に始まった「コレクション展Ⅰ」以降、こどもたちに、ひいては美術鑑賞の初心者にもコレクションに親しんでもらえるよう、より企画性の高いテーマ展示を導入している。

7月から11月にかけて開催した「コレクション展Ⅱ」のテーマは、「ニュー・コレクション―新しい美術との出会い」。この「ニュー」にはふたつの意味が込められている。ひとつには文字どおり「新しい」作品。前年度に収蔵したばかりの新収蔵品から、11点を披露した。同時にこれら新しいコレクションに限らず、以前からよく展示しているおなじみの作品も含めて、作品の「新しい」姿と出会い、美術の「新しい」楽しみ方を発見してもらう、これがふたつめの、そしてより伝えたかったテーマである。具体的には新収蔵品を軸に6つのトピックを立て、コーナー毎に旧蔵品も交えて展示を構成した。

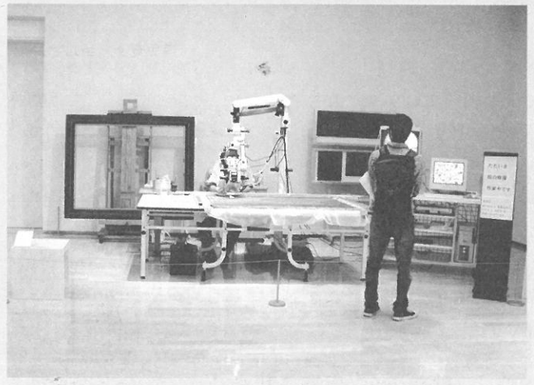
6つのコーナーのうち来場者の反響が特に高かったのが、「木版画と銅版画のつくり方」という、版画の技法を紹介したコーナーであった。当館実技講座の講師の協力も得て、木版と銅版の原版を間近に観察できるようにし、また、ただ技法を概説するのではなく、その技法ならではの表現の魅力を感覚的にとらえられるよう、キャッチコピー的な言葉で簡潔な解説を付すなど、もちろん工夫を凝らしたコーナーではあった。だが切り口としては新味のないオーソドックスなものだっただけに、その反響の高さは企画側にはむしろ意外でもあり、ベーシックなことこそ鑑賞者のニーズは高く、丁寧に続けていくべきであるという当然のことに、あらためて気づかされる機会となった。

あわせて話題を呼んだのが、「絵のおそうじ!?」のコーナーである。昨年度の新収蔵品のひとつ、鈴木清一作の油彩画《初秋の丘》（1921年）のおそうじ、すなわち洗浄作業の様子を紹介し、時には展示室で実演もした。油彩画の修復作業を展示室で公開するという例は、欧米では時折見かけるものの、国内ではまだまだ少ないだろう。当館としても今回が初めての試みであった。

《初秋の丘》は、ガラス等の保護がない状態で長らく個人宅に保管されており、表面にひどく汚れが付着していた。さいわい作品そのものの状態はさほど悪くはなく、洗浄作業を行うことで、作品の本来の見え方が相当に回復されるものと思われた。状態調査や繕いなどの準備作業を経て、約4ヶ月間の会期中、他の業務の合間をぬってということで不定期にではあるが、当館の保存・修復担当の田中千秋学芸員がクリーニングを実演した。

当初、会期末までに洗浄作業を完了する予定であったが、作業を進めるうち、予想以上に作品の表面がデリケートであることがわかり、閉幕の時点で空の部分の一部、画面全体の約15分の1の洗浄を終えるに留まった。だが実際に作業を目にすることが出来た方には、東京美術学校で外光派の教授陣に学んだ作者らしい、透明な空気感が画面によみがえってくるさまを、十分に実感いただけたのではないかと思う。また思うように捗らない作業の様子からはかえって、作品のおそうじとは日常的なおそうじとは到底比べものにならないほどの時間と労力のかかる作業であることを実感いただけたのではないかと思う。

すでに90歳を超えたこの作品がこれから美術館で過ごすであろう長い時間、わたしたちの生涯のいくつ分にもあたる長い長い時間から見ると、しかしこうした修復処置にかかる時間など、ほんの一瞬のことに過ぎないのかもしれない。そしてこの一瞬に行われたことが、作品をたしかに未来へと伝えてゆく。美術館の地道な舞台裏をあえて公開する今回の試みが、ただ物珍しさに終わらない何かを伝える機会となったのであれば、大変よろこばしい。　（えがみ・ゆか／当館学芸員）



顕微鏡を使用し、洗浄作業を行っているところ。

洗浄途中の鈴木清一作《初秋の丘》（会期末の状態）。

シャガール展関連事業

36日間の会期中、約77,000名の来館者の方々にご観覧いただいた「シャガール展　色彩の詩人」では、最終日が平日であったことや、通常の特別展より会期が少し短めだったこともあり、期間中にできるだけ多くの来館者にシャガールの魅力を知っていただこうと、多くの関連事業を実施しました。ここではふたつの記念事業を中心に報告します。

まず、9月7日に実施の記念コンサート「シャガールの調べ―ヴァイオリンとピアノで綴る詩情の世界」。作曲家でピアニストの林　晶彦さんと、ヴァイオリニストの金関　環さんによる、映像ありトークありのバラエティに富んだコンサートで、すべて林さん作曲のシャガールにちなんだ曲に加えて即興演奏も2曲披露され、約2時間20分（!）の上演時間はあっという間に過ぎ、およそ310名の参加者の方々にもご満足いただけたようでした。

もうひとつは、9月28日に実施の記念講演会「シャガールはなぜ七本指なのか?―ユダヤ文化論の窓から見たマルク・シャガールの世界―」。関西一円の大学で教鞭をとられている、ロシア文学・東方ユダヤ文化論がご専門の角　伸明さんが、シャガール初期の作品を中心に、それまであまり顧みられてこなかったユダヤ文化論的な観点から解説を行い、約290名の参加者の方々はそれに熱心に聞き入っておられました。

その他にも、毎週実施された学芸員やミュージアム・ボランティアによる解説会、おやこ解説会やこどものイベントなど、シャガールを存分に堪能していただくイベントを盛りだくさん実施しました。皆さん本当にありがとうございました。

（相良周作／当館学芸員）

息もつかせぬ名演でした

文化の日イベント

年々賑わいを増す感のある当館での文化の日。本年も11月2日、3日の両日に様々なイベントを開催しました。コレクション展のガイドツアー、美術館の建物をめぐる「美術館七不思議ツアー」、子どもたちへの絵本の読み聞かせ、ブラジル展にちなんだワークショップ、「アートであそぼ!ブラジル☆2DAYS」はいずれもボランティアさんが中心となって行われました。このワークショップでは、出品作家のジョゼ・アントニオ氏の作品にヒントを得て、子どもたちが和紙とワイヤーでいろいろな形を作り、エントランスホールに飾りました。ブラジル展記念トークショー「サッカーとアート」では、地元ヴィッセル神戸の二人のブラジル人選手、レアンドロ、ボッティ両選手が出演されました。美術とサッカーという異色の取り合わせにもかかわらず、ブラジルが取り持つ縁!のお陰で大いに盛り上がりました。またコレクション展関連では、「版画徹底観察!」と題して、担当の江上学芸員がルーペやライト、さらに顕微鏡も駆使して展示中の版画の徹底観察を行いました。インクの盛り上がりや紙の凹凸まで確認できる位作品に近接して観察することで版画の技法の特徴や表現の違いを実見してみようというこの観察会には多くの方が参加され、熱心に作品に見入っておられました。そして友の会の主催により、今秋韓国の釜山と光州で行われた二つのビエンナーレについて、出原学芸員によるレクチャーも催されました。この他、美術館の各所をまわるスタンプラリー、ビデオ上映会、コンサート、ブラジルのコーヒーフェアなども行われました。文化の日こそ美術館をPRする絶好の機会であり、いずれのイベントも殆ど無料で気軽に参加していただけるものばかりです。これらのイベントを通して美術館での楽しさを実感していただけたのではと思っています。

（飯尾由貴子／当館学芸員）

ジョゼさんにチャレンジした子どもたちの作品

1000人のおやこ絵画大会

トピックス

10月5日（日）、「HATでART!　1000人のおやこ絵画大会　へんな絵を描こう!」を開催しました。本大会は、美術館が位置するHAT神戸エリアを舞台に、アーティストと触れ合ったり、親子でお話ししながら一緒に作品を描いたりして、制作の楽しさや芸術への関心を高めてもらおうと新たに実施したものです。

今回の第1回大会は、その作品の魅力から子どもたちに絶大な人気を誇る当館所蔵作家、元永定正氏と中辻悦子氏ご夫妻を講師に招き、「へんな絵を描こう!」というテーマで実施しました。

当日は、あいにくの雨模様でしたが、親子あわせて670名のご参加をいただきました。本来は「なぎさ公園」や海辺等、HAT神戸全体で描いてもらう予定だったのですが、ご近所のJICA兵庫の体育館をお借りして、美術館と併せて2会場で行うことになりました。

はじめの会では、先生方に今回のポイントを教えていただきました。元永先生からは、うまく描こうと思わず自分の好きなように描くことが大切であるということ、見たことのない「へん」なものは「面白い」ものであるということ、材料を限定しては良いものが生まれないことなど、普段先生が大切にしておられることをおもしろおかしく語っていただきました。中辻先生からは、見ているものをそのまま描くのではなく、別の視点で描いてみようという具体的なアドバイスをいただき、子どもたちは楽しみながら挑戦しました。

美術館で「へんな絵」を描くこどもたち

大会終了後の10月11日（土）～11月9日（日）には、参加者の作品全376点をギャラリー棟に展示する「みんなの展覧会」を開催し、みんなの作品で美術館の壁面を鮮やかに彩りました。

（遊免寛子／当館学芸員）

●―編集後記

●いつまでも暑い日が続くかと思われた今年の秋でしたが、この原稿を書いている11月の半ばを過ぎて、ようやく例年並の寒さがやってきたようです。現在開催中の「ブラジル×日本」展では、展覧会本編で個性的な3人の作家がブラジル美術の“いま”を生き生きと伝えてくれたほか、サッカーやサンバといったブラジルらしいテーマを取り上げた関連イベントが毎週のように実施され、しばし寒さを忘れさせるかのような熱気を美術館に吹き込んでいました。これからもバラエティ豊かなイベントをご用意して皆様のお越しをお待ちいたしておりますので是非当館に足をお運びください。　（岡本）

兵庫県立美術館
quarterly report
ART RAMBLE
VOL.21

2008年12月20日発行
編集・発行：兵庫県立美術館
〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1
印刷：（株）サンメディア

「障害者アート」公募展の意義

服部　正

「ハートでアートこうべ2008」会場風景

美術館の周縁

当館の貸ギャラリーで、10月9日から12日まで「ハートでアートこうべ2008」という展覧会が開催された。これは、神戸市中央区社会福祉協議会が中心となって開催している障害者のための公募展である。2002年度から開催されている展覧会で、今回で7回目となる。以前は中央区吾妻通のコミスタこうべ（神戸市生涯学習支援センター）で開催される「個性とハートの祭典」の一部門として実施されていたが、昨年度から会場を当館の貸ギャラリーに移し、より広いスペースで大規模に開催されるようになった。

私は、初年度から審査員としてこの公募展に関わっているが、この展覧会にかぎらず、近年ではこの種の障害者アート公募展が各地で盛んに開催されている。関西電力による「かんでんコラボ・アート21」や産経新聞社による「はばたけアート・フェスタ」のように、企業が主催する障害者アート公募展もある。このような展覧会の意義を、私たちはどのように考えればよいのだろうか。

「障害者アート」というやや坐りが悪い言葉からも明らかなように、ここには障害者福祉と芸術という異なるふたつの視点が共存している。福祉という観点からすれば、重要なのは作品を作る作者と作品の間の関係である。障害のある作り手が、作品を作ることによって生きがいを感じること、展覧会などの発表の場において社会参加の機会を得ること、それらは障害者の生活の質を高めることにつながるだろう。

一方、アートという観点で見たとき、重要なのは作品とそれを鑑賞する人の間の関係である。美術鑑賞の場面において、作者に障害があるかどうかというのは、実はあまり意味のない問いかけである。20世紀後半のフランスで活躍した画家で、精神障害のある人が作った作品を数多く収集していたことでも知られるジャン・デュビュッフェは、「消化不良の人の芸術や膝の悪い人の芸術というものが存在しないのと同じように、精神障害のある人の芸術というものもあり得ない」と述べている。たしかに、作品を鑑賞した人がその作品に心を打たれるかどうかということに関して、作者の人となりや障害の有無は問題とならないはずである。

障害者福祉という前者の立場からすれば、応募された作品は等しくすべて展示されるべきだ。作り手の生の充実ためには、作品が描かれたこと、それが展示されることにこそ意義があるからだ。今回の「ハートでアートこうべ2008」でも、そのような観点から応募された392点の作品がすべて展示されていた。そして、出品の意欲をより高め、制作に向かう人が増えるようにという配慮から、一部の作品に優秀賞が授与され、最終日には盛大に表彰式が開催された。受賞者やその関係者の晴れやかな姿を見ると、この展覧会の目的が十分に果たされていると感じることができる。

美術鑑賞という方向から見ると、展示される作品には一定の選別が行われる必要がある。産経新聞社の「はばたけアート・フェスタ」はそのようなスタンスで作品の審査を行っているし、美術の世界で一般的に行われる美術団体の公募展では、ほぼ確実に審査による選別が行われる。それは、作品を鑑賞する人を主体として考えた場合には当然のことであろう。作品を鑑賞する人には、教養を高めたい、美しいものを見て安らぎたい、珍しいものが見たい、心を揺り動かされるような感動を味わいたいなど、さまざまな動機があるだろう。そのような鑑賞者の期待に応えるために、作品は選別され、効果的な展示の工夫がなされるのである。美術作品としての鑑賞という立場から障害者アートが評価される場面では、制作に集中する密度、みたことのない斬新な表現方法、直接的な心情の吐露などが注目を集めることが多い。美術関係者という立場から障害者アートの公募展に関わる私自身も、そのような観点で作品の審査を行うように心がけている。

全作品の展示か優秀作の選別か、そのどちらかに優劣をつけることはできないし、そのつもりもない。立場が異なれば、「アート」に何を期待するかが異なるのは当然である。障害者アート展の主催者や報道者、そして鑑賞者も含めて、私たちひとりひとりが障害者アートの内包するそのような振幅の幅を意識し、それを受け止めていくことが肝要だろう。

（はっとり・ただし／当館学芸員）

「ハートでアートこうべ2008」表彰式

「ハートでアートこうべ2008」に併設された「作業所製品制作体験コーナー」